

《賢儒画像扁額模本》（筑波大学本）の復元について

池田真理子

はじめに

一、《賢儒画像扁額模本》の概要

(一) 画面の状態とその表現

二、復元制作の資料

(一) 《賢哲画像》の状態

(二) 《賢哲画像》と《賢儒画像扁額模本》の比較

三、復元する人物像の形態設定

(一) 復元方法

(二) 尊名の表記

(三) 《賢哲画像》中の人物の確認

(四) 人物像の形態設定

(五) 復元過程で考察された事

おわりに

はじめに

筑波大学に所蔵されている《賢儒画像扁額模本》のうち、欠損した二面を想定復元することを目的に、日本画制作者としての立場から研究と調査を行ってきた。守屋正彦教授と中根恭子氏から美術史的な裏づけや説明を受け、藤田志朗教授の指導のもと分担して復元制作を行う。その復元に至る経緯として、試行錯誤に様々な行程を経てきた。現存する《賢儒画像扁額模本》の模写による技術の習得、原紙を再現するための実験的試み、より適した表現を実現させるための画材選択などである。以上の詳細は報告書において復元に至る過程を記述している。本稿においては《賢儒画像扁額模本》の欠損した二面の復元過程、特に人物像の形態決定について述べることにする。

失われた二面を復元するという試みは、無の状態から形状を想定しなければならぬため、曖昧な点が多いのが現実である。そのため欠損部分に関連のある資料を収集し、検討を重ねた形態設定が必要となる。これらは絵画制作者が記録に残すことの少ない部分であるが、制作の実際を記録することによって形態設定の理由を明らかにしたい。また制作過程を記録することに加

え、美術史的な協力を受けながら制作を進める事で、より確信の持てる画像の復元が可能である。横断的研究を生かして、正当性の高い復元を目指したい。

一、《賢儒画像扁額模本》の概要

筑波大学には《賢儒画像扁額模本》と称される一四枚の紙本墨画の作品が所蔵されている。各図の裏には「松谷天来粉本之印」と「東京高等師範学校図書館印」と捺印されている。筑波大学ではこれら一四枚を《賢儒画像扁額模本》と称しているが、各図は完成した本画ではなく下絵として作られており、湯島聖堂に掛けられていた扁額を模写したものと考えられる。しかし粉本と思われる湯島聖堂の扁額は現在残っていないため、直接的に関連性を確かめることはできない。筑波大学の《賢儒画像扁額模本》は左右八枚ずつ、計一六枚から成っていたが、関東大震災で二枚を焼失したため現存するのは一四枚である。各図には「左ノ一」、「左ノ二」、「左ノ三」…「左ノ八」、「右ノ一」…「右ノ八」と記されており、「左ノ六」と「右ノ三」が欠損している。

(二) 画面の状態とその表現

各図には扁額として描かれた枠が存在し、枠外にはその図の内寸と図の番号が記されている。図の大きさはまちまちで、縦九〇センチ、横二〇〇センチから二六〇センチ程度である。図の中には五人から八人ずつの人物像が描かれ、現在残っているのは左三九人、右四〇人の計七九人である。それぞれの人物の大きさは縦六〇センチ、横三〇センチ程度で、人物同士の間隔は各図によって異なる。各図の人物の上部にはその人物を指す名前が書かれてい

る。人物名は和紙の薄片に墨書きされたものを後に貼り付けたと思われる。

各図は保存のため折り畳まれており、縦七本から一一本、横二本の大きな折りじわが見られる。折り畳んだ状態でできたと思われる水じみが、そのしわにそってできていくものが多い。そのほかには小さなしわも所々に見られる。また虫食いも多く、大きなものは裏から紙を貼って補修されている。紙継ぎ部分が剥がれている場所や、紙の破れも数カ所に存在する。各図は火災により煤けており、特に黒ずんだ図には裏にチョークで「焼」の文字が記されている。泥が多く付着している他、裏に靴跡と見られるものが付着している図もある。

大学に所蔵されている《賢儒画像扁額模本》は下絵として作られた事が予想されるため、大まかな体の部分は素早い運筆で描かれている。墨がかすれている部分や、勢いのあるはね等、線の抑揚が豊かであると言える。さらに裾や襦袢には薄墨を使って質感の違いが表現され、顔や手には筆を変えた繊細な表現がされている。これらは《賢儒画像扁額模本》のほとんどの人物像に見られる特徴であり、人物を描く際にはいくつかの決まったパターンが存在していることがわかる。

二、復元制作の資料

欠損した図の人物像の形を決定する上では具体的な情報や資料が必要である。『昌平志』によると、欠損する二面には「右ノ三」に「秦祖」、「顔高」、「壤駟赤」、「石作蜀」、「公夏首」、「左ノ六」に「公西輿如」、「公西蔵」、「陳元」、「琴牢」、「歩叔乘」、計十名が描かれていたことがわかっている(1)。しかし筑波大学には欠損部分の画像資料が残されていないため、人物像の形態に

関する情報を収集する必要がある。筑波大学の《賢儒画像扁額模本》が経てきた歴史をたどると、特に関係が深いと考えられるのは湯島聖堂の先賢先儒を描いた扁額である。

かつて湯島聖堂には狩野常信が孔子の弟子八九人を描いたとされる一六枚の扁額が掛けられていた。しかし度重なる火災で内部の様子が失われ、現在では当時の扁額に関する画像資料は見つからない。元禄四年（一六九一）に湯島孔子廟の完成に伴い、狩野益信作の《賢儒像扁》を湯島に移動する。もともとは儒学者である林羅山が邸内の先聖殿の内壁に飾っていた木製扁額で、先賢先儒八九人の像を描いたものであった。当時の聖堂の様子を後に図版にしたものが《元禄四年聖堂之画図》として記録に残っている。しかしその《賢儒像扁》は元禄一六年（一七〇三）の火災で孔子廟と共に焼失した。翌宝永元年（一七〇四）湯島孔子廟再建時に狩野常信が描き直して再び掲げられたが、寛政二年（一七九九）に廟制度が改定された際に扁額も廃棄された(2)。

上記の《元禄四年聖堂之画図》には湯島聖堂内の賢儒像が描かれているため、欠損部の画像資料として参考にできる可能性があるか検討する。《元禄四年聖堂之画図》とは『聖堂略志』に掲載されている湯島聖堂内の様子を表した当時の印刷物である(3)。作者は菱川師宣とされる。大成殿を中心とする建物、昌平坂や参拝の人々の様子が俯瞰図で描かれており、図の右側に落款が押してあるが読み取れない。聖堂の俯瞰図とは別に、上部には孔子を囲む十哲と八七人の賢儒像が描かれている。さらに右には大成殿内の賢儒像の配置が人物名で図示されている。賢儒像は西側に四四人、東側に四三人が描かれ、頭上に人物名が記されているが、故意に名前を塗りつぶされているものがあり確認できるのは七〇人である。

《元禄四年聖堂之画図》を《賢儒画像扁額模本》と照らし合わせてみると、

名前の確認できる人物像のほとんどが同一人物を指しており、配置される順序も同じであることがわかる。しかし印刷された文字が読み取りにくく、また名前の表記の仕方が異なるためにはっきりとは確認できない人物もいる。《賢儒画像扁額模本》の人物と比較してみると、同じように扁額に入る五人から八人を線で区切っているが、中には三人や一人で区切られている部分もある。区切られた部分は「左ノ一」、「左ノ二」、「左ノ三」、「左ノ六」、「左ノ七」、「左ノ八」、「右ノ一」、「右ノ二」、「右ノ三」、「右ノ六」、「右ノ八」の割付けでは《賢儒画像扁額模本》と一致するが、その他は異なり人物名も塗り潰されている。また人物それぞれの体の形状を比較した場合、形や特徴に類似点が見られないことがわかる。(同じく東京国立博物館の《賢哲画像》とも人物像の形に共通点は見られなかった。) 全体的には服装や向き等、基本的な部分に共通点が見られるものの、湯島聖堂の扁額の人物像を忠実に模したものではないと予想される。

よって《元禄四年聖堂之画図》からは聖堂内の扁額の配置場所や孔子像と十哲との位置関係は読み取れるが、人物像の表現が《賢儒画像扁額模本》と類似しないため、欠損した人物像の形を決定するためには利用できない。

欠損部の資料が極めて少ないため、《賢儒画像扁額模本》、または湯島聖堂の扁額と関連のある資料を収集する必要がある。古くから多くの賢儒像の基とされた粉本の資料を中根氏に示唆されたが、欠損部の直接的な資料とすることはできなかった。その後の調査の末、東京国立博物館には先賢先儒を描いた《賢哲画像》が収蔵されていることが明らかになった。《賢哲画像》とは湯島聖堂の扁額の作者、狩野常信の作品である。筑波大学の《賢儒画像扁額模本》は湯島聖堂の扁額を模したものと考えられているため、これらには何らかの接点があることが予想される。二つの関連性を確かめるために実物を

調査し、欠損した人物像の形態決定に利用できるかを検討する。

(一)《賢哲圖像》の狀態

絹本に彩色され、東巻と西巻の二つの巻物状になっている。絹部分の幅は約八〇センチ。絹の破れや虫食い部分が見られるが極端な汚れはあまりなく、全体が絹より多少大きめの和紙で裏打ちされている。東巻に四四人、西巻に四五人、計八九人の賢儒像が描かれ、各人物像の大きさは縦約六〇センチ、横約三〇センチ程度。人物上部の裏打ちした和紙部分に、人物名が墨で右から横書きされている。《賢哲圖像》は八枚の絹本を継いで巻物状に裏打ちしたものであり、ひと幅の絹本には五人から八人の人物像が配置されている。《賢哲圖像》の二つの巻物には、それぞれ四四四四の人物の横に「中務卿法眼狩野養朴謹圖(図)之」と墨で縦書きされ、二種類の落款が押されている。

(二)《賢哲圖像》と《賢儒圖像扁額模本》の比較

筑波大学の《賢儒圖像扁額模本》に対応させると、東巻は左、西巻は右に当たり、絹本の継ぎ目の位置が各図で分けられた部分と一致している。絹の幅も《賢儒圖像扁額模本》の内寸と極めて近く、人物像の大きさもほぼ同じである。また《賢儒圖像扁額模本》に描かれた人物と《賢哲圖像》の人物、八九人の名前と配置の順序が一致した。一致しない人物名とは《賢儒圖像扁額模本》で「巫馬期」と記される人物で、《賢哲圖像》では「巫馬施」と記されているが同一人物と考えられる。

《賢儒圖像扁額模本》と《賢哲圖像》の同名で記された人物像を比較したところ、その形態が高い確率で一致することがわかった。動きの特徴が全く

一致するものが三五体おり、ほぼ同じであるか一部が共通するもの等を含めると、六割以上の人物像に確信の持てる類似点が存在する。《賢哲圖像》との関係は明確ではないものの、以上のように多くの類似点があげられるため、間接的なつながりがあることが想像される。よって欠損部分の復元資料として十分に利用可能であることが考えられる。

まず《賢哲圖像》と《賢儒圖像扁額模本》の人物表現の相違点について述べる。《賢哲圖像》の人物像は絹本に彩色されているため、表情や服装の個性が豊かであり年齢の設定も幅広い。体の線は太くしっかりしてかすれや素早い筆運びが少ないため、《賢儒圖像扁額模本》に比べると硬い印象を受ける。服装のしわの本数も整理されており模様も大変繊細である。これに対し、《賢儒圖像扁額模本》は人物像の個性を持ち物等で表現しており、表情や服装にはあまり変化が見られない。そして服装に模様は描かれず、帯や帽子、靴は簡略化されている。《賢儒圖像扁額模本》の人物像には頻繁に描かれている帽子の顎ひもや、方心円領という首飾りは、《賢哲圖像》の人物には全く見られない。同じく座具、矢、魚等も《賢哲圖像》には描かれず、紙、巻物、尺、劍、本のみ両者に共通して存在する。体の表現については、《賢哲圖像》の人物は《賢儒圖像扁額模本》に比べて足が小さく描かれている。手には足ほどの違いはないが、足とは逆に《賢儒圖像扁額模本》の方が多少細く小さめに表現されている。《賢儒圖像扁額模本》にはすべての人物にひげが描かれているが、《賢哲圖像》の中にはひげのない人物像が三体存在する。《賢哲圖像》の人物は肉付きの違いや年齢が描き分けられおり、顔色も一人ひとりで色味が変えられている。ただし外見的に特徴のある人物像については、両者で同一の表現がされている。

三、復元する人物像の形態設定

(一) 復元方法

復元制作ではクラフト紙に鉛筆で大まかな下図を作り、それを別紙に写し取り墨で下図を作る。下図は描き起こすごとに修正を加え、本制作に向けてより忠実な再現を目指す。人物の体の形態は東京国立博物館で記録した《賢哲圖像》の資料を参考にし、その他の顔や手足の表現、運筆等は現存する《賢儒圖像扁額模本》をもとに設定する。《賢哲圖像》の「秦祖」、「顔高」、「壞駟赤」、「石作蜀」、「公夏首、公西興如」、「公西葳」、「陳亢」、「琴牢」、「歩叔乘」の形態に近いと思われる人物像をそれぞれ一四枚の《賢儒圖像扁額模本》から選びだし、《賢哲圖像》と照らし合わせて下図を作成する。なお人物像の流れに違和感が生じないように、復元する部分の前後二つの図を確認しながら制作する。

以上の過程で決定した下図を元に本制作を行う。現存する一四枚の状態を参考に、復元用の原紙を忠実に再現する。一四枚の下絵は大きさがそれぞれで異なるため、復元用紙の大きさの設定が必要である。各図は小さな紙をつなぎ合わせて一枚の図が構成されており、小さく折り畳まれて保存されているため、畳み方や折り皺等の再現も必要である。またどれも虫食いや水染み、泥、場合によっては靴跡等が付着しており、全体的に煤けている。これらの状態を再現するため適切な方法を考察し、原紙を加工する。また技術面の復元には作者の運筆の癖や表現パターンを体得する必要がある。その方法として現存する《賢儒圖像扁額模本》一四枚の模写を行うことで、技術を習得し復元制作に臨む。墨や筆については模写を通して、復元制作に適したものを検討する。

(二) 尊名の表記

《賢儒圖像扁額模本》には各人物名を表す和紙の小片が各人物の後ろ上部に貼られている。「左ノ一」、「右ノ一」から「左ノ六」、「右ノ六」に描かれている人物は孔子の弟子を指す「賢人」または「先賢」と呼ばれる人物群である。「賢人」の名前の右上には「左一」から「左三十一」まで番号がふられ、右の場合も同じであると考えられる。「右ノ七」、「右ノ八」、「左ノ七」、「左ノ八」の図には「先儒」と呼ばれる後世の儒者が描かれており、尊名の表記にも「先儒左一」、「先儒左二」：「先儒左十三」、「先儒右一」：「先儒右十四」と、「賢人」とは区別して番号がつけられている。以上を考慮すると欠損した二面は「賢人」に当たり、「右ノ三」には「右十一」から「右十五」、「左ノ六」には「左二十七」から「左三十一」の番号がつけられていたと予想される。なお尊名が書かれた和紙の小片は、現存する一四枚それぞれで大きさが異なるため、前後の図との均衡を図って一枚ずつ設定する必要がある。「右ノ三」、「左ノ六」、「六尺五寸八分」等の小片も同様に適切な大きさを設定する。

右ノ三 (内寸七八・五cm × 一九七・〇cm 外寸九〇・五cm × 二〇八・〇cm)	「右ノ三」	(四・七cm × 二・三cm)
「六尺五寸八分」		(八・〇cm × 三・五cm)
「右十一 秦祖	シンソウ	(九・五cm × 四・〇cm)
「右十二 顔高	ガンコウ	(二〇・〇cm × 五・〇cm)
「右十三 壞駟赤	ジャウシセキ	(九・六cm × 三・八cm)
「右十四 石作蜀	セキサクシヨク	(九・六cm × 四・〇cm)
「右十五 公夏首	コウカシユ	(九・五cm × 四・〇cm)

左ノ六 (内寸七八・〇cm×一九四・〇cm 外寸九〇・五cm×二〇八・五cm)

〔左ノ六〕 (四・一cm×二・〇cm)

〔六尺五寸八分〕 (七・二cm×二・三cm)

〔左二十七 公西興如 コウセイヨジョ〕 (八・七cm×三・五cm)

〔左二十八 公西葎 コウセイテン〕 (九・〇cm×四・〇cm)

〔左二十九 陳亢 チンコウ〕 (八・三cm×三・五cm)

〔左三十 琴牢 キンロウ〕 (八・五cm×三・二cm)

〔左三十一 歩叔乘 フジョジャウ〕 (八・六cm×三・五cm)

〔三〕《賢哲圖像》中の人物像の確認

西巻 《賢儒圖像扁額模本》では右に当たる)

〔秦祖〕 体は右肩を手前に背中を向ける。足は右足のみが見え、右向き。顔は斜め右向きに振り返り、遠くを見つめる。右袖越しに両手を組んでいる様子が見える。

〔顔高〕 体、足共に斜め右向きに立ち、両手で巻物を広げる。やや顎をひいて地面に目を向ける。顔にはひげがないため若い印象を受け、口を軽く開いて微笑するようにも見える。

〔壤馴赤〕 体、足共に斜め右向きに立ち、腹の前で両手を組む。顔も斜め右向きに遠くを見つめる。ほかの人物に比べてひげや眉毛がやや多い。

〔石作蜀〕 体、足共に斜め右向きに立ち、顔は右真横を向いて顎を高くあげる。両腕で書物を抱え、左脇に剣を携えているのが見える。

〔公夏首〕 体、顔、足共に斜め右向きに立ち、右手に筆を持ち、左手に巻いた紙を持つ。

東巻 《賢儒圖像扁額模本》では左に当たる)

〔公西興如〕 体、足共に斜め左向きに立ち、右手に尺を持つ。顔は斜め右を振り返り、遠くに目を向ける。左手は袖に隠れていて見えない。

〔公西葎〕 体は左肩を手前に背中を向ける。足は左足のみが見え左向き。顔は斜め左向きにやや振り返り、目線を下に向ける。腕は下ろしており、袖に隠れて両手とも見えない。

〔陳亢〕 顔、体、足共に斜め左向きに立つ。両腕で書物を抱えているが、手は袖に隠れて見えない。頬にはひげがなく、目線は下に向ける。

〔琴牢〕 顔、体、足共に斜め左を向き、やや背を屈めて立つ。手は見えないが両腕を胸の前で合わせている。目線は下に向け、表情からきつい印象を受ける。

〔歩叔乘〕 顔、体、足共に斜め左を向いて立つ。右手は人差し指と中指を立てた形に出し、左手は腰紐を握る。目は垂れており、口を開いて微笑しているように見える。

これら《賢哲圖像》の人物像は彩色されており、《賢儒圖像扁額模本》に比べるとどれも装飾過多である。よってそのままの形態を復元に転用することはできない。さらに《賢儒圖像扁額模本》には作者の癖と思われる表現やパターンがあり、独特の風合いが存在するため、両者を比較しながら各人物像の適切な形態を作り上げる必要がある。また形態決定においては一〇体の人物像に基本となる形状があり、まず体の大きさは、《賢儒圖像扁額模本》と同様に一〇体共縦約九〇センチ、横約三〇センチに設定する。次に「右ノ三」の人物像は右向きに設定し、「左ノ六」の人物像は左向きに設定する。そして

顔の表情は《賢哲図像》を参考にし、眉、目、鼻、髭、耳、髪、髪、の個々の形状等は《賢儒図像扁額模本》の人物像の表現に合わせる。また衣服や装飾も《賢哲図像》のものを省略して用いること等があげられる。なお実際の復元制作では、肩や袖、帽子、靴は濃い墨で力強く描き、肩や袖は途中で故意に掠らせ、勢いのある撥ねを加える。裾や襦袢は薄墨でゆったりとした質感を表現し、顔には細く薄い墨を用いてひげは更にかすらせて表現する。

(四) 人物像の形態設定

右ノ三

「右十一 秦祖」(挿図1)

体は右肩を手前に背中を向ける。足は右足のみが見え、右向き。顔は斜め右向きに振り返り、袖越しに両手を組んでいるのが見える形に決定する。大きさは縦五八cm、横二七cm。《賢哲図像》の「秦祖」の形態は「申根」(《賢儒図像扁額模本》「右ノ六」)と形が類似するため、二つを比較しながら違和感のない形態を決定する。ただし「秦祖」は斜め右を振り返る形で表現されているが、「申根」は顔が真横に向いているので、申根の形状を参考にするのは服の様子のみである。頭には《賢哲図像》の皮弁を、模様を省略してかぶせる。皮弁(4)は《賢儒図像扁額模本》の中でも多く見られる冠帽であるため、適切であると判断した。靴は《賢哲図像》のものでなく、前後の図面の流れから煩雑に描かれているものを選ぶ。両手の形は《賢哲図像》の組み方を参考に、指を少し細めに表現する。《賢哲図像》の「秦祖」の背中には腰帯の装飾が見られるが、背面の見える《賢儒図像扁額模本》の人物一〇人にはそのような表現はないため、復元像では飾りのない帯として表現する。裾から見えている装飾された帯も同様に省略する。

「右十二 顔高」(挿図2)

体、足共に斜め右向きに立ち、両手で巻物を広げる。やや顎をひいて巻物に目を向ける形に決定した。《賢哲図像》の「顔高」にはひげがないが、《賢儒図像扁額模本》にはひげのない人物が見られないため顎、鼻の下、唇の下にひげを加える。大きさは縦五八cm、横二七cm。《賢哲図像》の「顔高」の形態は「顔辛」(《賢儒図像扁額模本》「右ノ二」)と類似するため、袖やすその広がりなど服装の全体感は顔辛を参考にする。頭には《賢哲図像》の幘頭を、模様を省略してかぶせる。簡略化された幘頭(5)は《賢儒図像扁額模本》の中に多く見られる冠帽である。靴も装飾をなくし、前後の図面に用いられている単純化されたものを、大きさを合わせて描く。「顔高」は手に開いた状態の巻物をもつ。書いてある文字は省略し、薄墨をさらにかすらせて表現する。目線は斜め下、口はやや開いた状態に設定した。帯から垂れる飾り紐は、《賢哲図像》と同じく二箇所で結ぶ。右の一、二では二箇所で結ばれた帯はなく、どれも二本が下に下がっているだけだが、「右ノ四」では二人の人物に二箇所で結んだ帯が見られるためこのように設定した。ただし「顔高」(賢哲図像)の帯下部分の装飾については《賢儒図像扁額模本》では左右七、八の図にしか見られないため削除した。

「右十三 壤駟赤」(挿図3)

体、足共に斜め右向きに立ち、胸の前で両手を組む形に決定した。顔も斜め右向きに遠くを見つめる。大きさは縦五八cm、横二八cm。《賢哲図像》の「壤駟赤」の形態は「鄒單」(《賢儒図像扁額模本》「右ノ四」)と類似するため、裾の広がりや手の組み方などを参照しながら形を決定する。ただし「鄒單」は首に方心円領を身に付けているが、近隣の図面には方心円領をつけている

人物が少ないため、復元像では身に付けない状態に決定する。また《賢哲画像》の「壞駟赤」は首元が多少露出して表現されているが、裾や袖と同じく《賢儒画像扁額模本》の表現に合わせた衣服を設定する。《賢哲画像》の「壞駟赤」の冠帽は、「陸九淵」(《賢儒画像扁額模本》「左の八」)のものと同形が類似するため、それを参考にしながら形を簡略化したものを用いる。靴は装飾をなくし、前後の図面に用いられている単純化されたものを、大きさを合わせて描く。手の組み方は「鄒單」と酷似しているため、顔の表現と同様に「鄒單」を参考にして描く。「鄒單」の袖の間には結んだ帯が垂れ下がるように見られるが、《賢哲画像》の「壞駟赤」の帯は上部が袖で隠れてしまっているため、復元像では両者の中間を採った表現に設定する。ただし「壞駟赤」(賢哲画像)の裾下部分の装飾帯については、《賢儒画像扁額模本》では左右七、八の図にしか見られないため削除した。

「右十四 石作蜀」(挿図4)

体、足共に斜め右向きに立ち、両手で書物を持つ。顔は右真横を向き、や顎を上げて速くに目を向ける形に決定した。大きさは縦五八cm、横三〇cm。《賢哲画像》の「石作蜀」の形態は「奚容蒧」(《賢儒画像扁額模本》「左ノ四」)を反転させた形と類似するため、衣服や腕の位置等の全体感には「奚容蒧」を反転させて参考にする。二つの像を比較しながら違和感のない形態を決定する。「奚容蒧」は両手を袖から出した状態で書物を持つが、《賢哲画像》の「石作蜀」は両手を袖の中に入れてそのまま書物を抱えている。復元像では《賢哲画像》の「石作蜀」を参考に、袖の中に両手を入れた状態に設定する。また《賢哲画像》の「石作蜀」は顎を高く上げた形で表現されているが、これは「奚容蒧」との中間の表現を採り、顎の高さを設定した。また「石作蜀」は脇に

剣を身に付けているが、《賢儒画像扁額模本》では全体的に剣を持つ人物が少なく、「奚容蒧」もまた身に付けていないため、復元像でも剣は身に付けない状態に設定する。靴は装飾をなくし、前後の図面に用いられている単純化されたものを、大きさを合わせて描く。冠帽は「石作蜀」がかぶるものと同じ種類のものを《賢儒画像扁額模本》に見つけることができないうため、「石作蜀」がかぶっているものを省略して復元像に表現する。「石作蜀」(賢哲画像)が身に付けている装飾帯については、《賢儒画像扁額模本》の「右ノ三」の図には適切でないと判断したため復元像では省略した。

「右十五 公夏首」(挿図5)

体、顔、足共に斜め右向きに立ち、右手に筆を持ち、左手に巻いた紙を持つ形に設定した。大きさは縦五八cm、横一九cm。《賢哲画像》の「公夏首」は、衣服の形と紙を持つ手の形が部分的に「后蒼」(《賢儒画像扁額模本》右ノ七)に類似している。このため衣服や腕の位置等の全体感には「后蒼」を参考にする。ただし左手の様子が異なるため、《賢哲画像》の「公夏首」のものを参考に運筆やかすれ等に配慮しながら設定する。筆と紙を持つ人物が《賢儒画像扁額模本》にも存在するため(左ノ二「伯虔」)持ち物の表現は「伯虔」を参考に、靴は装飾をなくし、前後の図面に用いられている単純化されたものを、大きさを合わせて描く。冠帽は「顔會」(《賢儒画像扁額模本》「右ノ六」)のものを参考に表現する。帯から垂れる飾り紐は、《賢哲画像》では二箇所では結ばれているが、右の一、二では二箇所では結ばれた帯はなく、どれも二本が下に下がっている。同じ図面上の「顔高」には二箇所では結んだ帯を設定したが、図の全体的な均衡を考慮して「公夏首」の帯紐は真っ直ぐに垂れ下がるよう設定した。また「公夏首」(賢哲画像)に見られる帯下部分の装飾に

ついても、「右ノ三」には適切でないと判断したため削除した。

左ノ六

「左二十七 公西輿如」(挿図6)

体、足共に斜め左向きに立ち、右手に尺を持つ。顔は斜め右を振り返り、遠くに目を向ける形に設定した。大きさは縦五九cm、横二八cm。《賢哲圖像》の「公西輿如」の形態は「公祖句茲」(《賢儒圖像扁額模本》「左ノ五」)と類似するため、裾の広がりや手の位置などを参照しながら形を決定する。ただし「公祖句茲」は尺を持たず、顎を高くあげているが、復元像では《賢哲圖像》の形態を参考に形を決定する。また図面のバランスを考慮して、復元像では頬のひげを省略した。《賢哲圖像》の「公西輿如」の冠帽は皮弁と思われ、装飾や形を簡略化したものを用いる。靴も装飾をなくし、前後の図面に用いられている単純化されたものを、大きさを合わせて描く。尺を持つ手の形は同じような表現のものが《賢儒圖像扁額模本》に見つからないため、《賢哲圖像》を参考に描く。帯から垂れる飾り紐は、《賢哲圖像》と同じく二箇所。前の図である「左ノ五」では見られないが、「左ノ四」や「左ノ七」には二箇所結んだ帯が見られるためこのように設定した。ただし「公西輿如」(《賢哲圖像》の帯下部分の装飾については、《賢儒圖像扁額模本》では左右七、八の図にしか見られないため削除した。

「左二十八 公西蔽」(挿図7)

体は左肩を事前に背中を向ける。足は左足のみが見え左向き。顔は斜め左向きにやや振り返り、目線を下に向ける。腕は下ろしており、袖に隠れて両手とも見えない形に決定する。大きさは縦五八cm、横二八cm。《賢哲圖像》の

「公西蔽」の形態は「秦商」(《賢儒圖像扁額模本》「左ノ四」)と形が類似するため、二つを比較しながら違和感のない形態を決定する。ただし「公西蔽」は斜め左を振り返る形で表現されているが、「秦商」は顔が真横に向いているので、「秦商」の形状を参考にするのは服の様子のみである。《賢哲圖像》の「公西蔽」の冠帽は「毛菴」(《賢儒圖像扁額模本》「左ノ七」)のものと同様にするため、「毛菴」のものを参照して設定する。靴は《賢哲圖像》のものでなく、《賢儒圖像扁額模本》の前後の図面に頻繁に描かれているものを選ぶ。《賢哲圖像》の「公西蔽」の背中には腰帯の装飾が見られるが、背面の見える《賢儒圖像扁額模本》の人物十人にはそのような表現はないため、復元像では飾りのない帯として表現する。裾から見えている装飾された帯も同様に省略する。

「左二十九 陳元」(挿図8)

顔、体、足共に斜め左向きに立つ。両腕で書物を抱えているが、手は袖に隠れて見えない。頬にはひげがなく、目線は下に向ける形に設定した。大きさは縦五七cm、横二八cm。《賢哲圖像》の「陳元」の形態は「句井疆」(《賢儒圖像扁額模本》「左ノ四」)と類似するため、衣服の様子や動きなどを参照しながら形を決定する。ただし「句井疆」は首に方心円領を身に付けているが、近隣の図面には方心円領をつけている人物が少ないため、復元像では身に付けない状態に決定する。《賢哲圖像》の「陳元」の帽子は冠と呼ばれるものと思われるが、《賢儒圖像扁額模本》には同類の冠が見られないため、前後の図面に多く描かれている幘頭を用いる。靴は単純化し大きさを合わせて描く。手の組み方や顔の表現は「句井疆」とよく似ているため、《賢儒圖像扁額模本》を参考に描く。《賢哲圖像》の「陳元」は腹の辺りで内側の衣服の重なり

が見えているが、これも復元像では省略する。「句井壺」の袖の間には結んだ帯が垂れ下がるように見られるが、《賢哲圖像》の「陳亢」の帯は上部が袖で隠れてしまっている。復元像の紐には《賢哲圖像》の形態を用いる。

「左三十 琴牢」(挿図9)

顔、体、足共に斜め左を向きやや背を屈めて立つ。手は両腕を胸の前で合わせ、目線は下に向けるよう設定した。大きさは縦五七cm、横二九cm。《賢哲圖像》の「琴牢」の形態は「顔之僕」(《賢哲圖像扁額模本》「左ノ五」)と類似するため、衣服の様子や動きなどを参照しながら形を決定する。《賢哲圖像》の「琴牢」は他の人物像と異なり、やや背を曲げたように表現されているため復元像もそのように設定した。手の組み方は「顔之僕」と類似しているため、《賢哲圖像扁額模本》の「顔之僕」を参考にして描く。《賢哲圖像》の「琴牢」の冠帽は皮弁と見られるため、《賢聖障子図》のものを基にして用いる。靴は《賢哲圖像》より単純化し大きさを合わせて描く。ただし図の番号が大きくなるほど、《賢哲圖像扁額模本》に描かれる人物像の装飾も複雑化するため、「右ノ三二」の人物像よりも複雑なものを設定する。ただし「琴牢」(賢哲圖像)の裾下部分の装飾帯については、《賢哲圖像扁額模本》では左右七、八の図にしか見られないため削除した。

「左三十一 歩叔乘」(挿図10)

顔、体、足共に斜め左を向いて立つ。右手は人差し指を立てた形に前に出し、右手は腰紐を握る。目は垂れており、口を開いて微笑しているように設定する。大きさは縦五八cm、横三〇cm。《賢哲圖像》の「歩叔乘」の形態は「樂效」(《賢哲圖像扁額模本》「左ノ五」)と類似するため、裾の広がりや手の動

きなどを参照しながら形を決定する。《賢哲圖像》の「歩叔乘」は右手の指を二本立てた様子で表されているが、「樂效」は一本の指しか立てていない。この場合《賢哲圖像扁額模本》の表現に合わせて復元像も一本の指を立てるよう設定した。左手の様子は「樂效」と異なるため、同様の表現を使い《賢哲圖像》の形態を転用する。衣服は《賢哲圖像》のものをを用いる。《賢哲圖像》の「歩叔乘」の冠帽は幘頭と見られるため、簡略化して《賢哲圖像扁額模本》のものを参考に用いる。靴は単純化し大きさを合わせて描く。帯紐は真っ直ぐに垂れたものを、装飾を省略して描く。

(五) 復元過程で考察された事

復元制作の過程では疑問に感じた点や検討された事が多々ある。これらは少なからず制作に影響を与え、形態を決定する上でも重要と思われるため記述したい。

・人物名と形態の関係

人物名が人物の形に与える影響について、その漢字の持つイメージが画像表現に影響したという考えが杉原たく哉氏によって示唆されている。紀元前の人物を想像だけで描き分けなければならない場合、具体的容貌が不明の人物には漢字の意味に頼って描いているという可能性が高い。実際筑波大学の《賢哲圖像扁額模本》の人物表現では、魚を手持っている像や後ろ向きに描かれた像などが見られ、復元制作の中でその理由の解釈に苦しめられた。それらは粉本として模写されたものであるため、元になった粉本の流れをたどると、明の石刻画にまで同じ形をみることができるといふ(6)。粉本の模写を繰り返していくうちに、人物の形状そのままの形が踏襲されたものと考

えられる。今回の復元制作の過程では、人物の形態が儀式やその人物名から想像されるものであるということも考慮された。しかしそれらから想定したものは確信が持てないため、より信頼性のある《賢哲圖像》の形態を元に制作することを決めた。

しかし《賢哲圖像》に比べると《賢儒圖像扁額模本》は古くから存在する粉本に忠実に模写されている。《賢哲圖像》の人物像には、《賢儒圖像扁額模本》にあるような魚を持つ人物や後ろ向き的人物は描かれていない。それらの人物は意表を衝かれる表現であるが、古くから存在する形態である。同じく古い粉本には描かれている方心円領や冠帽の頸紐なども《賢哲圖像》には存在しないため、狩野常信によって人物像の情報が整理されたのではないかと考えられる。

・《賢儒圖像扁額模本》の作者について

《賢儒圖像扁額模本》は各図の裏に捺印された印から、松谷天来という人物の作品である可能性が考えられる。しかし《賢儒圖像扁額模本》の「左ノ一」は他の一三枚とは異なる二種類の作風で描かれている。従って《賢儒圖像扁額模本》には少なくとも三種類の表現方法が見られるため、複数の人物によって制作された事が想像される。今回はその中で最も多く見られる一三枚の図、七三体の人物像の表現に合わせて復元を行った。また、《賢儒圖像扁額模本》では同じ作者による人物表現でも、一から六ノ図に描かれる「賢儒」と七、八の図に描かれる「先賢」では表現の差が見られる。具体的には、「先賢」の方が衣服や冠帽の種類が豊富になっていること、装飾が多いこと、顔の特徴が描き分けられていること等である。以上の点を考慮すると、「賢儒」よりも「先賢」の方が《賢哲圖像》の表現に近いといえる。しかし今回復元

にあたった二面はどちらも「賢儒」が描かれている部分であるため、主に《賢儒圖像扁額模本》の「賢儒」の表現に合わせて制作した。

《賢哲圖像》では八九人の人物像を通してそのような表現の差は見られない。ただし衣服に描かれた模様は大変細やかで、人物像の表現方法とは異なるため、専門の職人によって描かれたのではないかと考えられる。

・賢儒像の人数について

記録に残る様々な賢儒像では、そこに描かれる人数に違いがある。これは儒教の学派によって、誰を賢人、先儒として認めるかという意見の差で生じたものとされている。筑波大学の《賢儒圖像扁額模本》には欠損部を含めて八九人が描かれていたとされ、《賢哲圖像》でも同じく八九人の人物像が描かれている。元禄四年には扁額に描かれた八九人の人物名が記されているにも関わらず、《正位暨配享従祀諸賢儒方位次序図》には、「韓愈」を含めない八八人の扁額の配置図が記されている(7)。しかしその理由は不明確である。また同じ聖堂の扁額でも狩野益信の作成した扁額と、常信が作成した扁額では人物像の数があつたとされる。狩野常信は《賢哲圖像》に八九人の先賢先儒を描いているため、常信が作った湯島聖堂の扁額も《賢哲圖像》と同じく八九人であつたのではないだろうかと推測できる。

・色彩について

《賢儒圖像扁額模本》の人物像には、何かを表していると思われる文字がそれぞれの人物に記されている。カタカナと漢字で、コン、アサギ、白六、黄土などの文字が書いてあるが、消えかかっている読み取れない部分もある。これらは人物の服の色を指定したものではないかと予想されるが、シロウ、

ニクミなど何色を表すのかわからないものも多い。そこで絹本彩色の《賢哲図像》と比較し、それらが色と関係のあるものかを確かめたが、衣服と帯どちらの色にも関係性が見られなかった。仮にこれらの文字が色を指定したものであれば、《賢哲図像》とは異なる色が指定されていると考えられる。今回の復元制作は紙本墨画のため、人物像の色彩は問題にはならない。しかし《賢哲図像扁額模本》をもとにして、湯島聖堂内に存在した扁額を復元するためには今後残された課題である。

おわりに

旧湯島聖堂扁額模本の復元として、筑波大学に所蔵される《賢哲図像扁額模本》の復元を行った訳だが、大学のは横写として描かれているため未だ不明な点が残る。今後は彩色された旧湯島聖堂内の扁額についても、復元研究が示唆されている。現時点での《賢哲図像扁額模本》の欠損部分の復元という課題には、結果を出すことができたと考えている。

冒頭にも触れたが、この研究は美術史的な情報の援助を受けて成り立っているものである。《元禄四年聖堂之画図》、《賢哲図像》など、復元上重要な資料の調査、研究会議での情報の確認を通して、より完成度の高い復元を目指してきた。その結果、欠損した二面の復元として、信憑性の高いものを生み出すことができたと考えられる。このような横断的な研究は、個人では成し遂げられないものであり、各分野の協力によって今後新しい研究の可能性が感じられる。湯島聖堂内の礼拝空間を再現する上でも、この復元制作が研究の一助となることを願う。

注

- (1) 大冢遜『昌平志 巻第一 廟園誌』一八〇〇年。なお以下の文献を参照した。『日本教育文庫・学校篇』同文館 一九一一年 四二六―四二七頁。
- (2) 三宅米吉・中山久四郎編『聖堂略志』斯文會 一九三五年 二一―二三頁。
- (3) 前掲書注2。《元禄四年聖堂之画図》。
- (4) 金井紫雲『復刻版 東洋画題綜覧』国書刊行会 一九九六年 一六九頁。
- (5) 前掲書注4。一七四頁。
- (6) 杉原たく哉『中華図像遊覧』大修館書店 二〇〇〇年 三二頁―六七頁。
- (7) 『昌平志 巻第一 廟園誌』。なお、以下の文献を参照した。『日本教育史資料七』臨川書店 一九七〇年 四二六―四二七頁。

図版

復元 《會備図像福額模本》

右ノ三

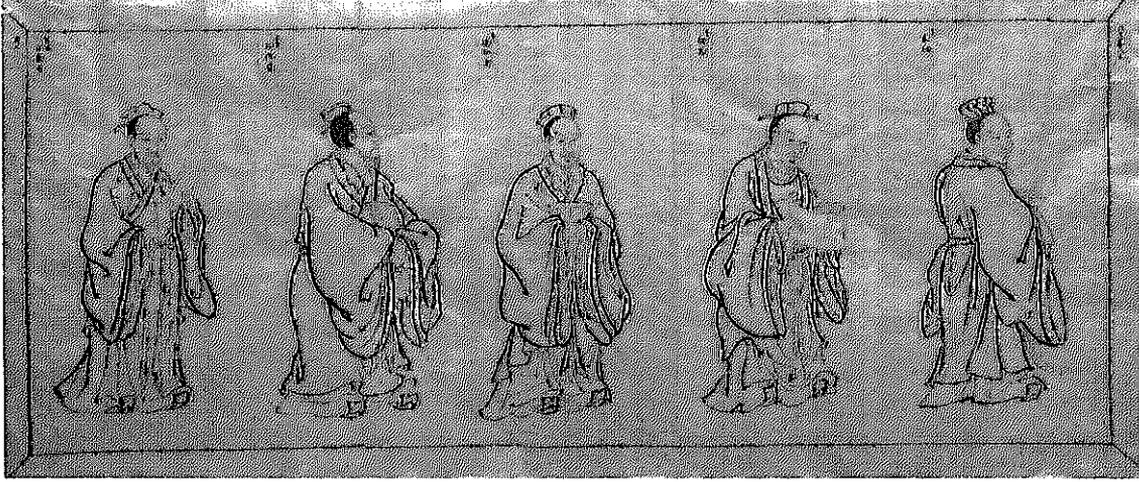
右十一
奏祖 シンソ

右十二
顔高 ガンコウ

右十三
壤駟赤 ジヤウシセキ

右十三
石作鋤 セキサクシヨク

右十五
公夏首 コウカシユ



復元 《會備図像福額模本》

左ノ六

左三十一
歩叔乘 フジヨシヤウ

左三十
琴牟 キンロウ

左二十九
陳兀 チンコウ

左二十八
公西蔵 コウセイテン

左二十七
公西興如 コウセイヨシヨ

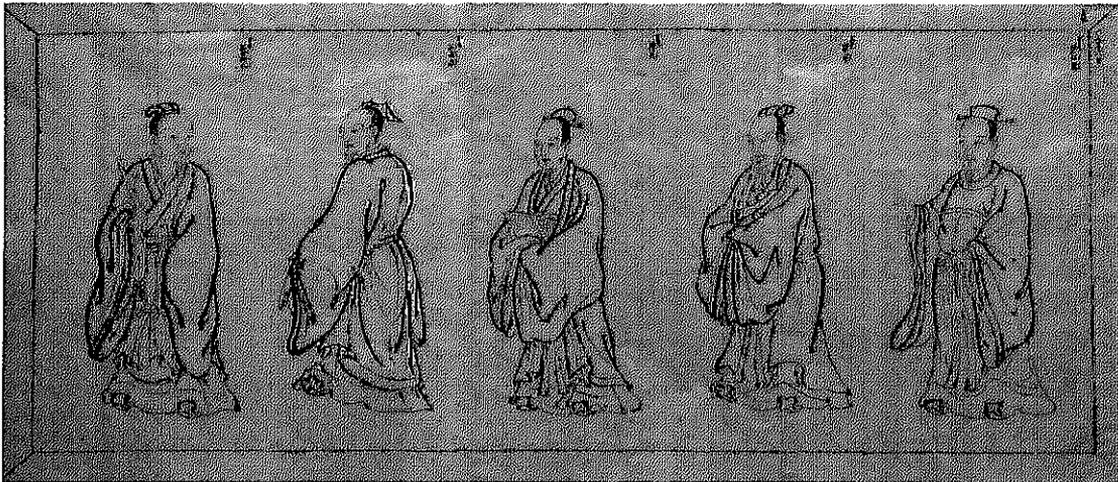
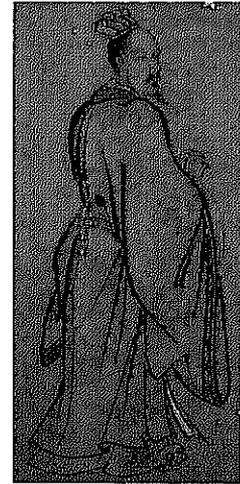
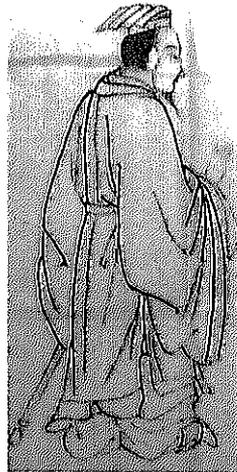


插图1 秦祖

《晋书》图像 秦祖



《晋书》图像扁额模本 右二十 申根



復元《晋书》图像扁额模本 右十一 秦祖



插图2 顔高

《晋书》图像 顔高



《晋书》图像扁额模本 右八 顔辛

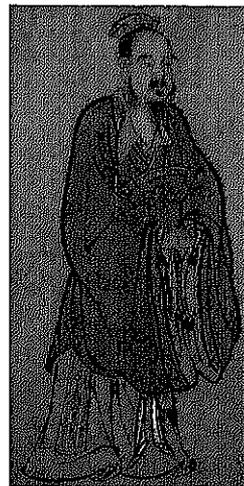


復元《晋书》图像扁额模本 右十一 顔高



插图3 壤駟赤

《賢哲圖像》 壤駟赤



《賢哲圖像像補模本》 右十八 鄒單

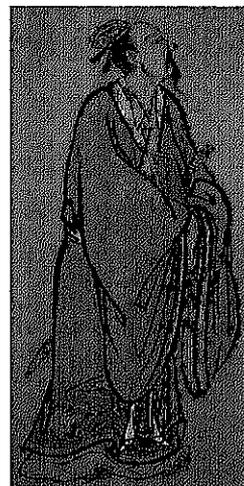


復元 《賢哲圖像像補模本》 右十三 壤駟赤



插图4 《石作蜀》

《賢哲圖像》 石作蜀



《賢哲圖像像補模本》 左十七 奚容蒧



復元 《賢哲圖像像補模本》 右十四 石作蜀



挿図5 公夏首

《賢臣図像》 公夏首



《賢臣図像扁額模本》 先儒右五 后君



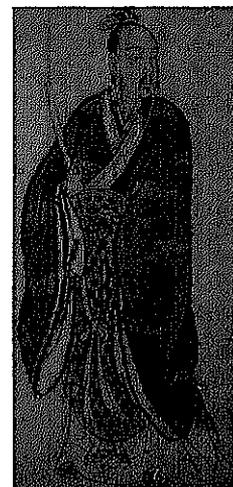
右十五
公夏首

復元《賢臣図像扁額模本》右十五 公夏首



挿図6 公西興如

《賢臣図像》 公西興如



《賢臣図像扁額模本》 左十一 公祖句茲



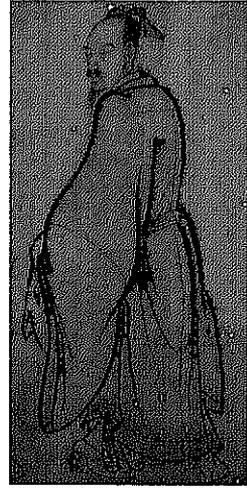
左十七
公西興如

復元《賢臣図像扁額模本》左十七 公西興如

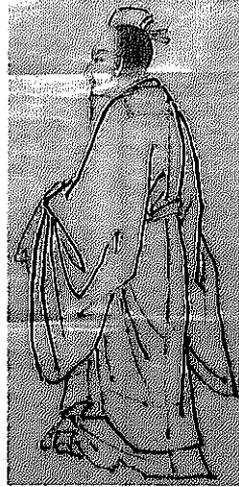


插图7 公西庇

《贤哲图像》 公西庇



《贤哲图像》 公西庇 左二十 秦商



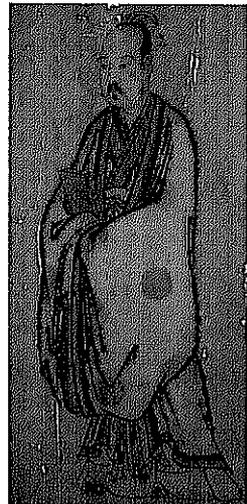
五廿八
公西庇

復元 《贤哲图像》 公西庇 左二十 秦商

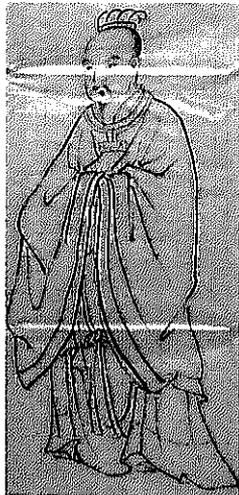


插图8 陳元

《贤哲图像》 陳元



《贤哲图像》 陳元 左十九 句井疆



左十九
陳元

復元 《贤哲图像》 陳元 左十九 句井疆



插图9 琴牟

《賢哲圖像》 琴牟



《賢哲圖像扁額模本》 左十四 顔之儀



左三十一
琴牟

復元 《賢哲圖像扁額模本》 左三十一 琴牟

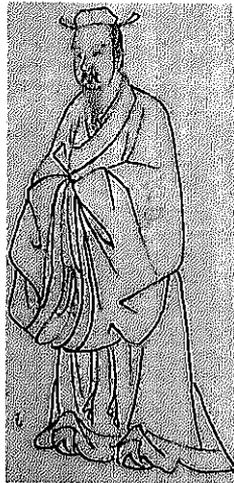


插图10 步叔乘

《賢哲圖像》 步叔乘



《賢哲圖像扁額模本》 左十五 樂欵



左三十一
步叔乘

復元 《賢哲圖像扁額模本》 左三十一 步叔乘

